KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

「境界」としてのリュジニャン城：『メリュジーヌ物語』における空間

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 境界, リュジニャン城, メリュジーヌ, フランス中世, 妖精 キーワード (En): 作成者: 傳田, 久仁子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006157

関西外国語大学 研究論集 第91号（2010年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.91 (March 2010)

「境界」としてのリュジニャン城

――『メリュジーヌ物語』における空間――

傳　田　久仁子

要　旨

中世フランスおいて人間と超自然のものとの出会いと結びつき（と別れ）をモチーフとしたテクストを、アルフ＝ランクネルは、代表的な妖精の名前をとって、モルガン型とメリュジーヌ型とに大別した。登場人物の空間の移動に着目したとき、人間の側が異界で「幸福な時」を過ごすのがモルガン型の物語であり、逆に超自然のもの（妖精）の側が「人間社会」に移動して「幸福な時」を過ごすのがメリュジーヌ型であるが、一方の代表として選ばれている『メリュジーヌ物語』においては、この出会いの場としての「境界」が、他の物語とは異なった特権的な空間としてあらわれる。そこでは「境界」が出会いの後のカップルの幸福の場として選ばれるのである。その理由を、物語内部（登場人物の属性）と、物語外部（執筆当時のリュジニャン城の状況）から探ってみると、リュジニャン城の「境界」としての性格が浮かび上がってくる。

キーワード：境界、リュジニャン城、メリュジーヌ、フランス中世、妖精

Ⅰ　本論の目的

中世フランスにおいて、特に12－13世紀には、人間と超自然のものとの出会いと結びつき（と別れ）をモチーフとしたテクストが数多く見られる。これらは主たる筋でない場合もあるにせよ、人間がある欠落条件の下で、超自然のものと出会い、ある禁忌を条件に「幸福な時（félicité du couple）」を過ごす、しかしやがて人間の側の禁忌の違反の後に、超自然のものが去るという、様々な異類婚姻譚にも共通した枠組みを持つ[1]。

中世における妖精についての研究をすすめるなかで、この枠組みを持ったテクストを分析したアルフ＝ランクネルは、これらを代表的な妖精の名前をとって、モルガン型とメリュジーヌ型とに大別した[2]。物語の舞台空間をこの世（ce monde）と異界（autre monde）に分け、登場人物の移動（「排除（異界）」と「統合（人間社会）」）に着目したとき、人間の側が異界で「幸福な時」を過ごすのがモルガン型の物語であり、逆に超自然のもの（妖精）の側が、人間社会に移動して「幸福な時」を過ごすのがメリュジーヌ型である。モルガンはアーサー王の義

姉として、また瀕死のアーサーを妖精の国であるアヴァロンへと連れ去る妖精として、様々なテクストに登場する。一方メリュジーヌは人間の騎士と結婚し、その一族に繁栄をもたらした妖精であるが[3]、モルガンほどにはその名を知られてはいない。しかしこれまでにも、人間に富（土地や子孫）をもたらす開拓者であり、建築妖精としての彼女を、騎士階級の「社会的な野心を象徴的かつ魔術的に体現する」と指摘したジャック・ル＝ゴフの論考や、クロード・ルクートゥによる分析など、様々な研究者たちの興味を引いてきた[4]。もちろんこの分類からはみ出るものもテクストによってはあるが、アルフ＝ランクネルの分類によって、妖精の性格付けが、物語空間における登場人物たちの動きにも反映されていることが明らかになったと言える。

では物語の空間構造そのものに焦点を当ててみるとどうか。出会いの場として選ばれる空間は、出会いの後のカップルの「幸福の場」として選ばれる空間とは、厳密には異なった場であることが分かる。これらの物語で、人間と異界の者が出会う場は、この世（人間の所属空間）と異界（妖精の所属空間）とのあわいに位置する「境界」であり、異なるコードに属する登場人物たちの「交通」の生じる空間として立ち現れるのである。それは自分の所属空間から他の空間への移動の障害として機能することもあるだろう。森が驚異の生じる空間として、中世の物語中、特別な位置を示しているのは周知のとおりであり、もちろんそれ以前から周縁の空間であり境界領域であった[5]。共同体の周縁部に位置することの多い森や水辺には、中心の秩序からは離れた性質が付与されやすく、多義的な場となるといえる。しかし本論で扱う「境界」は必ずしも恒常的に存在するものではない。森はいつも周縁部、すなわち境界に位置するが、この空間が「境界」として機能するのは、この場所がこの世と異界の要因との交通の場となったときなのである。この世と異界とは片方が想定されることで、はじめて存在しはじめる相互補完的な空間である。その二項対立の間で行なわれる交通は、二つの共同体の間の交通の場合よりも、より偶発的で限定されたものとなる。この交通の行なわれる特権的な場が「境界」であり、交通が行なわれることによって、森や水辺はその属性を明らかにするのである。つまり森であるから「境界」なのではなく、交通が生じたときに森は「境界」となるのである。この世と異界の要因の出会いが、ある空間の「境界」としての性格を目に見えるものにすることを確認しておこう。この出会いの後、アルフ＝ランクネルの指摘する通り、登場人物たちは「境界」を離れ、この世か異界のいずれかへと移動を完了する。

この前提に立ったうえで確認してみると、アルフ＝ランクネルが、妖精が人間の世界へ移動するタイプの代表として名前を用いた『メリュジーヌ物語』においては、この出会いの場としての「境界」が、他の物語とは異なった特権的な空間としてあらわれていることがわかる。ではそこでは「境界」がどう位置づけられているのか、また『メリュジーヌ物語』の空間構造が他と異なる理由は何なのか、その点を探るのが、本論の目的である。

Ⅱ　出会いの場としての「境界」

（ｉ）出会いの場の位置づけ

『メリュジーヌ物語』における「境界」を見ていく前に、まずはそれ以外の物語における「出会いの場」が人間の所属空間と超自然のものの所属空間の境となる「境界」であることを簡単に確認しておこう。

アルフ＝ランクネル自身、両者のタイプの構造を分析する中で、出会いの場面を次のようにまとめ、特にモルガン型における出会いの場は、妖精の所属空間とは区別される「境界」であることに触れている。モルガン型の出会いの場面は、①主人公が家を離れ、「異界の境界の一つ（l'une des frontières de l'autre monde）」へと向かう。②妖精の影響下にある動物が主人公に、「この境界を越えさせ、妖精の国へといざなう（fait franchir cette frontière et l'entraîne dans le royaume féerique）」。③妖精（しばしば導き手としての動物は妖精の化身である）が、主人公に恋を申し出る、とされる[6]。

一方メリュジーヌ型の場合、人間と妖精との出会いは、①主人公が自分の家から一人で出かける、または狩りの途中、仲間たちから離れる。②「主人公は森の奥へと入り、しばしば水のほとりである林間地に辿り着く（Il s'enfonce dans la fôret et parvient dans une clairière, souvent près d'un point d'eau）」、③彼は驚くほど美しい女性が、一人でいるのを見つける、彼女はあたかも彼を待っていたかのようである、となる[7]。

妖精の所属空間が物語上で言及されないことも多いメリュジーヌ型では、モルガン型でのように、出会いの場が「境界（frontière）」であるかどうかをアルフ＝ランクネルは言明してはいないが、主人公の家とは区別される場所であり、どちらのタイプの物語においても、主人公たちはこの出会いの場を離れ、いずれかの所属空間へと移動していく。

たとえばル＝ゴフが『メリュジーヌ物語』の先行作品としてあげ、ルクートゥやアルフ＝ランクネルが「メリュジーヌ型」として挙げているテクストをみてみると、妖精たちは森の奥や、水辺などの出会いの場から離れ、人間社会の象徴である城や主人公の家へと移動し、そこで暮していることがわかる。出会いの場が異界ではなく「境界」であることがわかりにくい作品もあるが、妖精の所属空間が別にあることが示唆される物語も多い[8]。

モルガン型に分類される物語では、導き手の動物によって森の奥へといざなわれ、その水辺で妖精と出会ったり、障害に出会ったりする。その後、妖精の住居へと移動が行なわれることから、出会いの場はここでも異界とは厳密には区別される場所であるといえるだろう。出会いの場が「境界」として、この世と異界のどちらとも区別される空間であることを確認したうえで、『メリュジーヌ物語』についてみてみることにしよう[9]。

(ii)『メリュジーヌ物語』概要

題名ともなっているメリュジーヌとは、フランスの実在の一族であるリュジニャン家の始祖とされ、リュジニャンの城や街をはじめ、ポワトゥ地方の数々の建築物を造ったとされる妖精だが、この名前を持った妖精が物語に登場するのは14世紀末と15世紀初頭に相次いで書かれたテクストが初めてである。14世紀末にはジャン・ダラスが散文で、15世紀初頭にはクードレットが韻文で、それぞれメリュジーヌについての物語を書きあげた[10]。

彼女は母親を裏切った父親を許せず、姉妹とともに父を勝手に罰して死に至らしめたために、妖精である母親からかけられた呪いによって土曜日だけは下半身が蛇の姿となる。結婚相手に、土曜日に何をしているかを問わず、その姿を探さない（見ない）という約束を守ってもらえれば、人間として死を迎えることができる。しかし約束が破られれば、最後の審判の日までさまよいつづけなくてはならないという運命を持つ。物語中や民間伝承において、いくつもの城や教会などの建築物をたちまちのうちに造り上げたとされるが、特にリュジニャン城については物語中でも「一族の血を引くもの以外がこの城を手にする事はない」と予言し、「領主の変わる三日前には姿を現す」と言い残したと書かれる。ではこの妖精がどのように主人公と出会い、別れを迎えるのか、先ほど確認した構造に沿いながら、あら筋を追ってみることにしよう。

①人間と妖精の出会いと結婚（vv.1－1353）

ポワティエにほど近い土地に住まうフォレ伯は子沢山であった。その一人であるレイモンダンは、伯父にあたるポワティエ伯エムリに見込まれ、その館に仕えることになる。ある日コロンビエの森で狩りが行なわれ、エムリ伯とレイモンダンは大猪を追ううちに、他の者たちからはぐれてしまうが、エムリ伯が星の運行から予言したとおり、大猪との格闘中に、レイモンダンは誤って伯父を殺してしまう。茫然自失の態で森をさまよううち、馬に運ばれるまま、森の奥の泉（出会いの場）に至ったレイモンダンは、夜の泉のほとりにたつ世にも美しい三人の貴婦人に呼びとめられる。自分の名も、森での不幸のいきさつについても何故か知っているこの不思議な乙女の美しさに心を奪われたレイモンダンは、彼女の助言と結婚の申し出を受ける（ここでメリュジーヌは、土曜日には自分の姿を決して探さぬようにという禁忌を課し、同時にキリスト教の側の者であることを言明する）。レイモンダンは彼女の忠告通り、何事もなかったかのように城へ戻り、無事に伯父の葬儀を済ませる。

さらに彼女の忠告通り、２人の出会いの場所である泉のまわりの土地を、一枚の鹿皮で囲めるだけ賜るよう、新伯爵に願い出て許される。メリュジーヌの言葉通りにレイモンダンの前にあらわれた男たちによって長く糸状に加工された鹿皮は、広大な土地を囲んでしまう。ポワティエ伯やフォレ伯らを招いて、正式な結婚式をあげることを望むメリュジーヌは、いずこからともなく忽然と現れでた臣下の者たちを率いて、盛大な祝宴を、賜った土地にて執り行う。式の

後、メリュジーヌ自身の指揮のもと、職人たちがあっという間に城を造り上げる。城は彼女の名前をとってリュジニャンと名づけられる。

②人間と妖精との幸福（富の享受、土地、城の取得と子孫の誕生）（vv.1354－2976）

結婚式の晩に授かった第１子ユリアンをはじめ、次々と10人におよぶ息子たちに恵まれ、子孫の誕生と平行するかのように、ポワトゥ地方にいくつもの建造物や街を造っていく様が物語られる。下の２人を除く息子たちは皆、身体に何らかの異界の血の「標徴」を帯びている（ただしその「標徴」以外は、身体的にも「欠けることなく美しい」と描写される）。長じた息子たちはそれぞれに武勲や婚姻により、各国の王や領主となっていく。

第１子　ユリアン、キプロス王、顔が短く横に広く、目が片方が赤、片方が緑。
第２子　ウード、マルシュ伯、顔が火のように輝き真っ赤に光る。
第３子　ギイ、アルメニア王、片方の目がもう一方より低くつく。
第４子　アントワーヌ、ルクセンブルク王、片方の頬からライオンの足が飛び出る（ライオンの足は毛むくじゃらで尖った爪もついている）。
第５子　ルノー、ボヘミア王、一つ目（頭頂部に目がある）。
第６子　ジョフロワ（またの名を大歯のジョフロワ）、巨人との戦い、弟殺し（マイユゼ修道院の焼き討ち）、伯父殺し（フォレ伯への復讐）、口から外に突き出る一本の大きな歯。
第７子　フロモン、マイユゼ修道院に入る、鼻の上に狼の毛皮のような毛むくじゃらのしみ。
第８子　オリブル、メリュジーヌの立ち去りの際の命令により殺害、三つ目（一つは額にある）。
第９子　レイモン、フォレ伯、「標徴」無し、メリュジーヌ立ち去りの際まだ乳飲み子。
第10子　ティエリー、パルトネ伯、「標徴」無し、メリュジーヌ立ち去りの際まだ乳飲み子。

③禁忌の破綻と、妖精の立ち去り

１）一回目の禁忌の破綻：秘密の遵守（vv.2977－3228）

ある日、レイモンダンの兄であるフォレ伯は弟のもとを訪れ、メリュジーヌに関する噂を耳に入れる。彼女が土曜日に姿を見せないのは、他に恋人を作っているせいか、あるいは妖精の世界に行っているというのだ。怒りに駆られたレイモンダンは、かねての約束も忘れ、メリュジーヌのいる場所へと剣をとり急ぐ（妻のいる場所は知っていたが、それまでそこへ行ったことはなかったと書かれる）。嫉妬にかられ、鉄の扉を前にして、剣で穴を開け中を覗いた彼は、水浴している妻の腰から下が蛇の姿となり、水を打っているのをみる。一瞬恐怖に駆られるものの、我に返り、後悔にさいなまれながら部屋へと取って返すと、怒りの矛先を兄に向け、城から追い出す。妻を失う不安に震えつつも秘密を守るレイモンダンのもとに、何食わぬ顔をしたメリュジーヌが戻り、そうと気づきつつも夫の過ちを咎めずにいる。

2）二回目の禁忌の破綻：秘密の露見（vv.3229－4402）

しかし息子ジョフロワが巨人討伐の旅先で、弟フロモンが自ら進んで修道院に入ったことを知り、怒りにかられて弟ともども修道院を焼き討ちにすると、レイモンダンは悲しみと怒りのあまり、メリュジーヌのもとに急ぎかけつける。メリュジーヌは、ジョフロワも改悛すれば許されるのだと語り、冷静にレイモンダンを諭すが、彼は、臣下の面前で、お前が悪魔の血を伝えたせいでジョフロワのような子が生まれたのだと罵ってしまう。この言葉を聞くや気を失ったメリュジーヌは、夫に向かい嘆きの言葉を語り、今後のリュジニャン一族についての予言、リュジニャン城についての予言、まだ幼い子供たちについての指示などを頼み残すと、皆の目の前で窓に飛び乗り、蛇に変身すると、空へと飛び立つ。そうしてポワトゥ中にとどろく悲痛な叫び声をあげながら、三度城のまわりをめぐり、空の彼方へと消えてゆく。以後、夜に、幼子のもとを訪れ乳を与える彼女の姿を乳母たちが目撃するものの、レイモンダンがメリュジーヌと会うことは二度となかった。

④妖精の立ち去り後の人間（vv.4403－7152）

修道院焼き討ちの後悔にとらわれつつ、ジョフロワは巨人を追った山中の洞窟の中に、メリュジーヌの父親の墓をみつけ、そこに書かれた碑文から、自分の母の生い立ちを知ることになる。彼女自身もまた人間である父と妖精の母との間に生まれた子であり、母と交わした禁忌を犯して、母ともどもに自分たちを妖精の国アヴァロンへと立ち去らせる羽目に陥らせた父親を勝手に罰したために、母からそれぞれの運命を定められた三姉妹の末娘であった。ジョフロワはリュジニャンへと戻ると、怒りにかられるまま、母の立ち去りの原因ともなった伯父、フォレ伯を殺す。父レイモンダンはアラゴンへ赴き、僧となって余生を送ることを決める。父から許しを得たジョフロワは母の秘密を父に語る。その後、結婚することのなかったジョフロワについて、またメリュジーヌの2人の妖精の姉妹のそれぞれの運命、リュジニャンの末裔の運命を語りつつ、物語は幕を閉じる。

（iii）『メリュジーヌ物語』における「出会いの場」の特権性

物語全体に目を通したところで、あらためて舞台空間について整理してみよう。出会いの場面において、騎士であるレイモンダンは、城（人間社会を代表する空間）から離れ、森での狩りの途中、巨大な猪を追って皆からはぐれ、伯父と二人きりで森の奥へと至る。「境界」にはいつでも誰でも足を踏み入れることができるわけではなく、選ばれた者のみがたどりつくことができるある種排他的な空間であるが、ここでもその性質は守られている。導き手は巨大な猪である。伯父の死後、ひとりきりとなった主人公は、茫然自失の態で馬に運ばれるまま、さらに森の奥へと進み泉へと至る。自らの意思を失った状態で、猪、ついでは馬にいざなわれて初

めて、泉へと至るのである。「森の奥の水辺」も、多くの作品に出会いの場として選ばれる空間であり、主人公はそのほとりに立つ妖精と出会うことになる。妖精の側の所属空間の位置については物語中ではっきりと示されないが、彼女が母とともに暮した場所はアヴァロンであり、最後にはこの場所を立ち去り、いずこへともなく飛び去っていくことを考えると、この泉を異界とは異なる「境界」ととらえることは可能だと思われる。ここまでは他の異類婚姻譚における出会いの場面と、大きな差異はないといえるだろう。

しかしこの物語の特異な点は、妖精が、主人公に愛を告げる際、土曜日に姿を探さないという禁忌以外にも、もう一つ指示を行なうことである。それがこの出会いの場所の取得である。この土地を、これまでの褒美として、一枚の鹿皮で囲める分だけ賜るよう新領主に願い出るように命じ、またその土地を手に入れてからは（いずこからともなく現れた職人たちや、信じがたいほどに細く切られた鹿皮や[11]、囲まれた土地からは途端に水が湧き出すなど、土地の入手自体への異界の力の介入が暗示されている）、そこで正式な結婚式をあげることを望み（まだ何も無い土地での婚姻の祝宴に主君たちを招くことに多少の不安も抱く主人公をよそに、メリュジーヌはたちまち数多くの天幕とチャペルをそこに出現させる）、式後にこの場所に城を建てたのは、他でもない妖精自身であった。つまり他の物語では交通が生じた後はこの世か異界への移動が生じ、あくまでも通過点でしかなかった「出会いの場」としての「境界」が、ここでは婚姻後の「カップルの幸福」の場として、妖精自身によって選ばれ、機能しはじめるのである。

確かにこの空間は、「出会い」の場面以降、領主に代表される人間社会の側が恒常的に入り込むことのできる空間に変わってはいる。そもそもこの森は、昼間には、それまでも狩りを通して城の者たちにも開かれた場ではあったといえるが、交通が生じる場としてその奥に用意された空間、つまり夜という限定された時間に、猪などの導き手によって選ばれた者が自らの意思ではない状態でしか入ることのできない、超自然の者との出会いの場としてあらわれる「境界」として機能していた空間とは、性質を異にするようになったといえる。一見したところ、妖精がこの世の側で婚姻をあげて後は、「境界」は人間社会の側に組み込まれ、超自然のものとの出会いなど起こらない、誰に対しても開かれた、人間社会の秩序の支配する「安全な場」に変容したとも見えるからである。

だが果たしてそうなのだろうか。この世の側に組み込まれた「境界」は、もはやその性質をとどめてはいないのか。確かにメリュジーヌはこの後、ポワトゥ地方に次々と城などを建設していき、彼女が土曜日に異界のものとしての自身の姿に戻る場所、つまり蛇への変身が露見する禁忌の違反が行われる水浴の場や、二度目の禁忌の違反が行なわれる場所も、ダラスではメルヴァン城、クードレットではヴーヴァン城であって、もはやリュジニャン城ではない。しかしダラスの物語での二度目の違反の際のメリュジーヌの動きは注目に値する。当初ニオールで

城を建築中だったメリュジーヌは、ジョフロワの罪の知らせを聞くと、夫のいるメルヴァン城ではなく、リュジニャン城へと向かうのである。そこで二日を過ごし、取り乱しながら城中をめぐり、嘆きながらいろいろな場所をまわる。三日目になってようやく彼女はリュジニャン城を離れメルヴァンへと向かう。竜への変身と立ち去りが行われるのは確かにメルヴァン城においてだが、その直前のリュジニャン城での二日間の嘆きが描かれることで、この空間へのメリュジーヌの偏愛が浮かび上がってくる。さらにダラスでは、別れの場面でも、再びリュジニャン城がクローズアップされる。クードレットの作品ではメリュジーヌが銀と青とに尾をきらめかせながら空に飛び立ち三度輪を描いてみせるのはヴーヴァンの城の塔の周りだろう。そしてそのまま彼女は彼方へと去っていく。しかしダラスではメルヴァンから飛び立って向かった先はまたしてもリュジニャン城であり、三度空中で円を描きながら飛ぶのも、この城の塔のまわりである。こうしてみると、禁忌の違反や、彼女が皆の面前で変身し窓から飛び去る舞台は確かにリュジニャン城ではないながらも、リュジニャン城同様、妖精自身の手によって建てられたこれらの城を、リュジニャン城の代替物と考えることが可能なのではないか。何よりも立ち去りの際に彼女の言い残す予言はリュジニャン城についてのものであり、自分の名をつけた「名づけ子」とも呼べるこの城が続く限り、今後もリュジニャンの城主の交代の三日前には、城の周りに姿をあらわすことと約束する。乳飲み子である息子たちに夜乳を与えに訪れる城は明確にはされないが、別離の後も姿こそ隠しながらも、この場所に関わり続ける。姿の見えぬときは、平地か泉の周りにいると思ってくれという言葉は、妖精自身が当初から偏愛を示したこの空間が、この世の外見をまといながらも「境界」としての機能を保っていること、つまり異なるコードに属する者同士の交通の場として働き続けていることがわかる。誰もが足を踏み入れることのできる場に姿を変え、この世の側の一部となったかに見えながらも、出会いの場はその「境界」としての機能をひそかに保存し続け、とりわけ毎週土曜日にはその機能を働かせていたのであり、別離の後にもそれは続いていく。

Ⅲ　『メリュジーヌ物語』における「境界」の特権性（１）物語内

（ｉ）主人公たちの欠落条件としての罪

ではなぜこの物語では、これほどまでにこの出会いの場が主要な舞台であり続け、妖精からの偏愛が語られ続けなければならないのだろう。その理由をまずは物語内部に求めることができるだろう。

異界のものと出会う資格を与えられる主人公は、数々の美点に彩られながらも、必ず何らかの「欠落条件（プロッフ）」を持つ。その「欠落」を補完するために主人公の移動が生じるわけである。たとえば、『レ』や『作者不詳のレ』の主人公たちを見てみると、ランヴァルは王

妃の求愛を拒んだため、女を愛せないとののしられ、王妃の讒言によって主君からも疎まれて、経済的にも困窮していた。グラエラントやガンガモールも同じく王妃の求愛を拒んだことで、誹謗により王からの報酬の道を断たれて、身動きできない状態に陥らされたり、これまで誰一人生きて帰ってきたもののいない危険な猪狩りの冒険へと出立するよう挑発を受けた。ギジュマールやビスクラヴレでは、恋をしないことが非難の対象となっていた。人間の側が女性の場合も同様である。愛し合う王との間に10年もの間子供ができていなかった王妃や、年老いた夫の嫉妬深さによって塔に幽閉されていた女性など、異界のものと出会う主人公たちは、何らかの欠損状態にあった。

なかでも「モルガン型」に分類される物語の主人公たちは、いずれも何らかの理由により、この世での所属空間から排除された存在であった。主人公たちには他とは区別される美点があるにせよ、それはむしろ結果的にこの世での不遇を引き起こしており、彼らの不遇こそが異界のものとの遭遇を可能にし、この世から異界へと足を踏み入れるきっかけとなっていた。

「メリュジーヌ型」の代表であるレイモンダンも、そういった主人公たちの一人である。そもそも長男ではなかった彼は、子供が多くさほど裕福ではない父のもとを離れ伯父にひきとられており、伯父には息子がいたため、跡取りとしての道は閉ざされていた。とはいえ寵愛を受けており、不遇とはいえなかった彼の欠落条件とは、その伯父を、故意ではないとはいえ死に至らしめてしまったことだった。妖精の助言により、伯父殺しの罪をいったんは封印することができたとはいえ、この負の要因が、たとえ弱められた形にせよ、彼をこの世の側から排除していると考えることは可能だろう。

ではなぜ彼は、「モルガン型」の主人公たちのように異界へと移行してしまわないのか。それにはもう一人の主人公である妖精メリュジーヌが関係してくる。他の「メリュジーヌ型」の物語での妖精たちもしばしば恋を求めてこの世への移動を行いはしたが、メリュジーヌの場合は、よりはっきりとした欠落条件を与えられている。レイモンダン同様、彼女も肉親（父）を死に至らしめており、自らの所属空間である異界からは排除された存在だったのである。つまりこの物語の主人公たちは、二人ともが肉親殺しの罪を犯すことによって、人間の所属空間であるこの世の側にも、妖精の所属空間である異界の側にも移行することが、あらかじめ拒まれていたのだといえる。こうして双方の空間からそれぞれ排除された主人公たちは、そのあわいの土地を手に入れ、そこに城を建てることで、自らの居場所を生み出す以外にない。

（ii）罪の性格づけ

しかしこの二人の主人公たちの肉親殺しの罪には共通した特徴がある。それはいずれの殺人にも、故意とはいいきれない要素があるということである。レイモンダンの場合、自らの意思とは関わりのない罪であることが一番わかりやすい形で描かれているといえるだろう。伯父を

助けようとして猪に切りつけた剣の切っ先がすべり、はからずも伯父の命を奪ってしまう。その直前に、星を読むことに長けていた伯父が、誰に降りかかる運命かは知らぬままに、今まさに一人の男が主君を殺して強大な力を手に入れようとしていると予言するのに対し、なぜ運命は単に悪事をなすために人間を成長させるのかと運命の非道さを伯父に向かって嘆く姿も、抗うことのできない運命にまきこまれた主人公という位置づけを補強している。メリュジーヌの場合は、確かに姉妹とかたらって父親を山の洞窟に幽閉した。それは自ら進んで行なった行為であり、結果的に父親を死に至らしめることになった。しかしその理由は、そもそも父親が母親を裏切って、課された禁忌に違反したことへの怒りによるのであり、母のことを思っての行為でもあった。レイモンダンとは違い、母親自身の手によって3人の姉妹たちはそれぞれ呪いをかけられることですでに罰を受けてもいる。こういった要因によってその罪はたわめられているといえるだろう。

主人公たちの罪の性質を考えてみるとき、もう一人この城に強く結び付けられた登場人物が浮かび上がってくる。その人物とは、二人の間に生まれた息子、第6子ジョフロワである。彼だけは長じるとすぐに他国へと遠征に出かけ、それぞれの土地で領地を手にする兄たちと異なり、冒険の旅に出るとはいえ、ただ一人このリュジニャン城で死を迎えることになるわけだが[13]、彼もまた、両親同様、肉親殺しの罪を犯した人物であることは興味深い。

しかし弟が僧院へ入ったことを聞いて怒りにかられ、僧院のなかにいた他の僧侶ともどもに弟を焼き殺してしまった彼の罪は、レイモンダンやメリュジーヌの犯した罪とは色合いを異にする。信心深く騎士としての道を捨てたとはいえ、殺された弟に罪はなく、一方的なジョフロワの怒りによって犯された罪は、他の僧侶たちをまきこみ、肉親殺しにとどまらない点でも両親たちとは異なる。その違いは物語にも反映されているように思われる。ジョフロワの罪は、父の怒りを駆り立て、禁忌を違反させることで、母を永遠に失わせた。さらには父に禁忌を違反させる最初のきっかけとなった伯父をも手にかけることで、最終的に父を出家させ、この空間から立ち去らせることになる。つまりジョフロワは弟殺しによって、両親の物語をも終焉に向かわせるのである。レイモンダンとメリュジーヌは、それぞれの肉親殺しの罪により所属空間を離れることになったが、その罪には留保がつけられ、この世の中に保存された「境界」として双方の世界の力の均衡を保つ空間であるリュジニャン城（あるいはその代替物としての他の城）で「幸福」を享受することができた。しかし息子ジョフロワによる、留保をつけることのできない肉親殺しの罪は、彼らの幸福を終わらせ、唯一の所属空間から彼らを追放するものとなる。彼ら二人の関係によって生まれ、成り立っていた空間は、彼ら二人の幸福をも成り立たせていたのである。その属性により、揺れ動く交通の場としての「境界」にしか存在できなかった主人公たちは、この出会いの空間を変容させ、この世の側に持ち込むことに成功したが、この一見安定したかのようにみえる「第三項（変容した境界）」は、永続できるものではなかっ

たのだともいえる。

とはいえその一方で、焼き討ちにあった修道院が、実はそれ以前から罪に染まっていたのだと物語られることで僧侶たちの罪が強調され、ジョフロワの罪が多少となりとも軽減されていることも忘れてはならないだろう。もう一人の息子オリブルと比較してみたとき、その違いがよりはっきりする。メリュジーヌは、幼いながらも自らの意思で残虐な振舞いを続ける息子オリブルの命を奪うよう、立ち去りの際に命ずる。確かにジョフロワの肉親殺しは両親のそれとは区別されるものではあったが、オリブルの罪と比較した時、物語の中で罪が二種類に分類され、ジョフロワの罪も両親と同じグループに属すよう設定されていることがわかる。この事件の後、ジョフロワがリュジニャン城へ再び戻ってくるためには、巨人を倒して人々を助け、母の出生の秘密を明らかにする旅が必要だったが、さらに城へ戻ってから後の改心と贖罪が描かれることによっても彼の罪の色合いは薄められていくだろう。ただし彼はその後も結婚することはなく、子孫を誕生させることもない。こうしてみてみると、リュジニャン城とは、罪を犯し所属空間を追われてはいるものの、情状酌量の余地のある登場人物たちにのみ用意された、一種の「煉獄」[13]の役割も果たしているといえるかもしれない。

（iii）登場人物たちの出生

この世にも異界にも属してしまわない空間としての「境界」を考えるとき、この物語の登場人物たちの出生の両義性も目を引く。レイモンダンとメリュジーヌとの間に誕生した子供たちは、もちろん人間と妖精の血を引くものたちであり、特に第8子までは身体にその「標徴」を帯びている。しかし興味深いのは、妖精であるはずのメリュジーヌ自身もまた、人間である父親と妖精の母との間に生まれた存在であることだろう。罪によって所属空間を追われるというだけではなく、その血筋によって、自らの身体の中にこの世と異界との双方をあわせもつ存在として設定されていることは、境界を「幸福の場」として選ぶ登場人物たちにはふさわしいといえるかもしれない。主人公たちの属性は、すべて中間を、境界を指し示している。その性質は彼らが定義づけを拒み、どちらか一方への分類を拒んでいるかのようであるが、だからこそ、人間社会に紛れ込んだ、見えにくい形に変容した「境界」にあって、この世と異界との仲介者たりえたのだともいえる。

Ⅳ 『メリュジーヌ物語』における「境界」の特権性（2）物語外

ここまで境界がクローズアップされる理由を物語の内部から考え、『メリュジーヌ物語』では、「境界」がこの世の側に属する空間として固定され、この世の側に属しながらも、そのもともとの「境界」としての機能を保つ場として描かれていることを確認してきた。ただし「境

界」の色合いは一見したところ薄められ、異界との交通の場として機能する時間は、それまでよりもさらにはっきりと限定され、「境界」の変質とでもいうべきものが起こっていたわけだが、それは登場人物たちの犯した罪が、そうとは明示されないながらも、彼らがこの世と異界のどちらに移行することをも阻んでいたからであった。では物語から離れて、その執筆背景に目をやったとき、何が見えてくるのか。

（ｉ）リュジニャン一族の滅亡

メリュジーヌという名前を冠した物語として、現存する最も古いテクストは、14世紀末と15世紀初頭のジャン・ダラスとクードレットによるものであることは先ほども確認したが、歴史の舞台でもこの時期にリュジニャン一族の名前がクローズアップされる事件が起こっていた。直系はすでに絶えながらも、キプロス王であるピエール・ド・リュジニャンはその騎士ぶりを当時の詩人たちにも歌われるほどに有名だったが、フランスを訪れて十字軍の呼びかけを行い人々の耳目を集めたのち、帰国後に暗殺されたのが1369年のことであった。1393年にはジャン・ダラスが『メリュジーヌ物語』を書き上げるが、国を追われ、パリへと亡命してフランス王の庇護の下に暮していたアルメニア王、レオン・ド・リュジニャンが、ジャン・ダラスが物語を書き上げた３ヶ月後にパリで客死をとげる。白い喪服での葬儀が人々に強い印象を残したことが、1401年以降、『メリュジーヌ物語』をパルトネの領主であるギヨーム・ラルシュベックに命じられて作成したクードレットの作品中でも言及されている。そもそもリュジニャン家は、12世紀にすでにポワトゥ地方にあって、アリエノール・ダキテーヌとも関わりを持っていた一族であった(4)。ギイ・ド・リュジニャンは婚姻によりエルサレム王となっていたが、その地位を失ったものの、アリエノールの息子である獅子心王リチャードによって獲得されたキプロスを貰い受け、キプロス王となっていた。直系はすでに１世紀近く前に絶えてはいたものの、傍系とはいえ、十字軍とも関わりが深く、以後２世紀に渡ってキプロス、アルメニアの領地を手中にしていた一族であるリュジニャン家が、こうして衰退し滅亡していくのを人々が目の当たりにしたのが、物語の執筆とも時期を同じくする14世紀から15世紀にかけてのことだったのである。こうしてみると、この物語が11世紀から15世紀にかけての、ある実在の一族の隆盛と衰退の理由を物語る縁起譚としても読むことができることがわかるが、しかしリュジニャン城が物語中で、特権的な位置を占める直接の理由とはならない。

（ii）百年戦争の中でのリュジニャン城

ではリュジニャン城と結びつく当時の状況とは何だったのだろう。リュジニャンの街は、フランス西部のポワトゥ＝シャラント地域圏、ヴィエンヌ県にある街で、ポワティエの南西約25キロの地点にあり、ポワティエとの間には、コロンビエの森が広がっている。リュジニャン城

は現存しないが、当時、この地域は百年戦争の攻防の只中にあって、その所有者を変え続けていた。誰がこの城を手中におさめるかは、地理的な条件からも政治的関心事だったのである[15]。『メリュジーヌ物語』の執筆を命じた依頼主たちは、この城をめぐる争いの只中にいたものたちだった。物語の中で、主人公たちによるリュジニャン城の立つ土地（「境界」）の取得が、封建制度に則った合法的な取得によるものであるという所有権の正当性が描かれ、他方では、異界の側のものであるメリュジーヌの予言によって、一族の血を引く以外のものは城主になれない運命であり、物語の注文主がこの一族につながる一族のものであることが描かれる。そう考えると、この物語の主役はむしろリュジニャン城であるとさえいえるのではないか。注文主たちの巻き込まれていた城の所有権をめぐる攻防の投影がそこには見てとれるといえる。1413年、ベリー公の死の3年前に作成が開始された『ベリー公のいとも豪華なる時祷書（Les très riches heures du duc de Berry）』には、ベリー公の所有する城が描かれている月が多いが、3月の項にはリュジニャン城が描かれ、その右端の塔の上には、竜の姿となったメリュジーヌが描きこまれている。もちろん多くの「メリュジーヌ型」の物語では、しばしば異界の力を帯びた子孫の誕生が描かれる。また一族の始祖譚では、異界のものとの婚姻によって生まれた血筋であることを描くことによって、その家系の特別な力が暗示される。これらの物語においては、異界のものとの間に生まれる子供の誕生を通じて異界の力を所有する欲望が物語られることが多く、『メリュジーヌ物語』でも確かに末の二人の息子は、異界の制御できない力を周到に排除され、標徴を持たない「安全な」状態で、異界の力をその末裔に伝えている[16]。しかし直系の家系はすでに途絶えているこの時代に相次いでこれらの物語が語られた理由は、子孫による異界の力の取り込みというよりは、むしろ異界の力を帯び、「境界」としての特性を保ち続けた空間（城）の所有が語られる必要があったためであり、その城の持つ力自体がおのずから城主を選ぶのだという展開が、注文主たちの城の所有の欲望を垣間見させながら、物語中で語られることになったのだともいえる。

物語の中で、誰もが足を踏み入れることのできる「境界」をこの世に出現させ、異界の力を伝えた一族はその罪によって衰退、滅亡した。彼らはその罪に留保がつけられることで、この世の側の秩序にも受け入れられてはいたが、物語の最後では、むしろ「境界」としての力を保ったリュジニャン城に光が当てられる。現実の世界においては直系の一族が滅亡をとげたことによって、異界の力がむしろこの空間に保存され、しかもこの特別な力が働き続けていることこそが、リュジニャン一族の縁戚に当たると主張するフランス国王や自分たち以外の者たちの城の所有を阻み、城の掌握を正当化する。そこでは、異界に属する特権は手にしたまま、一方で「危険な」異界の力はたわめられた状態が望まれている。異界の力の中の排除すべき要因と、欲望の対象となる要因、そのせめぎあいが、執筆当時の依頼者たちの置かれていた政治的状況

とも重なることで、他とは異なる『メリュジーヌ物語』における独自の空間構造に反映されている可能性は否定できないのではないだろうか。

注

1）本論は、大阪市立大学院に1991年に提出した修士論文『メリュジーヌ物語における「境界」の変容』、また1994年、京都大学における日本フランス語フランス文学会での口頭発表「「境界」の位置－『メリュジーヌ物語』におけるリュジニャン城」の一部を発展させたものである。

2）Laurence Harf-Lancner, *Les Fées au Moyen Age : Morgane et Mélusine : La naissance des fées*, Champion, 1984.

3）アアルネ・トンプソンの分類では、「本格昔話」の「魔法の話（T300－749）」の中の、T400－459≪Super naturel or enchanted Husband（Wife）or other relatibes≫に結び付ける点では意見が一致しているが、その中のどのテールタイプを選ぶかでは研究者によって意見がわかれている。

4）Jacques Le Goff et Emmanuel Le Roy Ladurie, ≪Mélusine maternelle et défricheuse≫, *Annales E.S.C.*, 1971. 近世におけるメリュジーヌについては、ルロワ＝ラデュリが執筆。ル＝ゴフの方は後にJacques Le Goff, *Pour un autre Moyen Age. Temps, travail et culture en Occident : 18 essais*, Gallimard, 1977（『もうひとつの中世のために　西洋における時間、労働、そして文化』加納修訳、白水社、2006年）に収録。Claude Lecouteux, *Mélusine et le Chevalier au cygne*, Payot, 1982. またル＝ゴフが『絵解き　ヨーロッパ中世の夢』（監修樺山紘一）、原書房、2007年でもメリュジーヌに一章を割いているが、これ以外にもメリュジーヌについての様々な論考が出されている。

5）森については様々な論考が提出されているが、メリュジーヌにも章を割いているものとしては、伊藤進『森と悪魔　中世・ルネサンスの闇の系譜学』、岩波書店、1992年、などがある。

6）Laurence Harf-Lancner, *op.cit.*, pp.212－213. なお異界のモチーフについては、Francois Dubost, *Aspects fantastiques de la littérature narrative médiévale*, Champion, 1991などを参照。

7）*Ibid.*, p.113.

8）12世紀から13世紀にかけてのラテン語によるテクストの中には、メリュジーヌの名こそ登場せず、舞台もリュジニャンではないものの、ほぼ同じ筋を持つ物語がある。それがティルベリのゲルウァシウス（ジェルヴェ・ド・ティルビュリ）の作品であり、散文によってメリュジーヌの物語を綴ったジャン・ダラスがその典拠として作品中で名前をあげている。その作品『皇帝の閑暇』は、1209－1213年に執筆され、オットー4世に献呈された（ティルベリのゲルウァシウス『西洋中世奇譚集成　皇帝の閑暇』、池上俊一訳、青土社、1997年、講談社学術文庫、2008年）。作者は、ヘンリー2世とその息子ヘンリーに仕え、その際「無駄話集」（現存せず）を執筆。その成功をうけ、この作品を企画したが、王の死により頓挫。イタリアへ移ったのち、1189年からは皇帝領であったアルルに居を移す。因みにこの本を献呈されることとなった皇帝オットー4世の母親はヘンリー2世の娘。三部からなる著作の

うち、129の章からなる第三部が驚異譚を集めたものであるが、その第3部第57章が「エペルヴィエ城の貴婦人」、その第1部第15章が「堕罪のあと瞠いた目」（ルーセ城のレイモン）である。エクス＝アン＝プロヴァンス近くのトレ谷にあるルーセ城の領主であるレイモンは、馬に乗り一人で気晴らしに出かけた際、ラル川の近くで素晴らしい衣服を身にまとった美しい乙女に出会う。彼女に恋を告げると、彼女の裸体を見ないという約束のもとに、申し出は受け入れられる。結婚式が行なわれ、城は豊かになり、子供たちが生まれる。しかしある日部屋の中で入浴中の彼女の前に置かれた幕をレイモンがとってしまうと、彼女は蛇の姿に変身し去ってしまう。彼女のもたらした富も消え去っていく。しかし子供たちはとどまり、彼女は夜毎、子供らの世話をしにあらわれたが、その姿は見られることはなかった。末裔が誕生している（ゲルワァシウスは、この物語は「卑俗な者たちが伝えている」と記している）。

他にも、ヘンリー2世とアリエノール・ダキテーヌの宮廷に仕えたウォルター・マップ（ゴーティエ・マップ）の『宮廷閑話集』1181－1193年、の第4部9章の「大歯のヘンノ」や、第2部12章の「野生のエドリクス」第二部11章の「ウォスティニウス・オブ・ウォスティニュク」がこのタイプの筋書きを持つ。またエリナン・ド・フロワモン（1200年前後、現存せず）の要約をのせた、ヴァンサン・ド・ボーヴェの『自然の鑑』（1250年頃）での逸話、ジョフロワ・ドクセールの『黙示録注釈』（1187－1194年）での物語、プランタジネット家の始祖（赤毛のフルク伯の妻）についての物語を伝えるギラルドゥス・カンブレンシス（ジロー・ド・バリ（カンブリ））の『君主の教訓』（1217年）などは、その短さや、テクストの種類からも『メリュジーヌ物語』の空間構造と一概には比較できないものの、最初に例にあげた「ルーセ城のレイモン」のように、「境界」での出会いと考えられるものが多い。

9）具体的な作品の内容については、アルフ・ランクネルの前掲書や、『中世ブルターニュ妖精譚』（関西古フランス語研究会、1998年）所収の拙論「レにおける異界」などを参照。

10）ダラスのテクストには、Jean d'Arras, *Mélusine*, éd. L.Stouff, Dijon, 1932と*Mélusine ou La noble histoire de Lusignan,* éd. et trad. de Jean-Jacques Vincensini, Le Livre de Poche (Lettres gothiques, 4566), Paris, 2003がある。クードレットのテクストには、*Le Roman de Mélusine ou Histoire de Lusignan,* éd. Roach, Klincksieck, Paris, 1982と*Le Roman de Mélusine,* trad. de Laurence Harf-Lancner, Garnier- Flammarion, Paris, 1993があり、邦訳には、クードレット『西洋中世綺譚集成　メリュジーヌ物語』（松村剛訳）、青土社、1996年（巻末に、ジャック・ル・ゴフ、エマニュエル・ルロワ＝ラデュリによる論文が載せられている）、およびクードレット『妖精メリュジーヌ伝説』（森本英夫・傳田久仁子訳）、現代教養文庫、社会思想社、1995年がある。以下に挙げるテクストは特に断りのない場合、クードレットのものを使用する。

11）この鹿皮のエピソードが異界の物語に登場することについては、Jean-Jacques Vincensini, *Motifs et thèmes du récit médieval,* Nathan, 2000を参照。

12）異界の標徴を帯びておらず、現実の一族の祖先とされる末の二人の息子たちは除外する。

13）中世の煉獄の概念の誕生についてはル＝ゴフ『煉獄の誕生』（渡辺　香根夫，・内田　洋訳）、法政大学

出版局、1988年、参照。

14）クードレットのテクストの校訂者であるエレアノール・ロチは、その詳細な論考において、メリュジーヌの建築妖精としての姿には、11世紀から13世紀にかけてのポワトゥ地方が新造建築物であふれかえった、アリエノールの時代とも重なる時期の記憶が反映されているのではないかと指摘している。1200年にはアリエノールの息子であるジョン失地王が、リュジニャン家の婚約者を略奪して結婚、争いともなっている。

15）その後1417年には、リュジニャン城はフランス国王シャルル７世のものとなる。以降、担保として持ち主を変えつつも、絶えずシャルル７世はリュジニャン城を取戻すほど、この城を気に入っており、1444年には国王のための祝宴で妖精メリュジーヌの物語が出し物として上演されたりもした。

16）異界の力を帯びた子供の誕生の問題については、ル＝ゴフやアルフ＝ランクネルなど多くの研究者も指摘しているが、Danielle Régnier-Bohlerの次の二つの論考なども参照。≪La fonction symbolique du féminin : Le savoir des mères, le secret des sœurs et le devenir des héros≫, in *Masculin / Féminin dans le roman arthurien médiéval,* Amsterdam-Atlanta, Rodopi, 1995. ≪Figures féminines et imaginaire généalogique : étude comparée de quelques récits brefs≫, in *Le Récit bref au Moyen Age,* Champion, 1979. なお拙論「異類婚における「所有」－十二、三世紀における作者不詳のレから－」、『フランス語フランス文学研究』第71号、1997年、でもこの問題について触れている。

（でんだ・くにこ　国際言語学部准教授）